

# 熊野信仰における「五衰殿女御譚」の形成

小川路世

## はじめに

『熊野の本地』と題されたモノガタリがある。松本隆信氏は、『神道集』に同じ内容の本地モノガタリが収載されていることを根拠として、このモノガタリが南北朝時代までに成立していたと指摘している。<sup>1)</sup>

しかし、『神道集』に収載される「熊野権現事」と、小稿に取り上げる『熊野の本地』とは、いくつかの相違点を見いだすことが出来る。その相違点のうち、もっとも顕著であるのが「五衰殿の女御について語られるモノガタリ」なのである。以下小稿では、『法華経』の功德をもつて「五衰殿の女御」が天界に生まれ、「神」として熊野に垂迹するモノガタリを取り上げ、『法華経』功德譚として「五衰殿の女御について語られるモノガタ

リ」が形成されていることを指摘する。そして、熊野における法華信仰、さらには、法華信仰に裏付けられる女人往生を具現するモノガタリとして『熊野の本地』が作成された過程について考察することにした。

## 一 『神道集』「熊野権現事」と『熊野の本地』の原拠

松本隆信氏は『熊野の本地』について、次のように指摘している。<sup>2)</sup>

『神道集』に至って、その具体的な姿をあらわし、以後、熊野権現の縁起を語る物語として広く流布した五衰殿物語は、その典拠となった目すべき説話を仏典の中に見出すことが

できる。それは、『旃陀越国王経』である。

また、松本氏は、数多く伝存する『熊野の本地』諸本を整理して、次のように系統付けた。<sup>3)</sup>

室町時代後期から桃山時代頃の絵巻・奈良絵本をはじめ写本が非常に多く、版本にも寛永頃の丹緑本・寛永八年版・元禄頃の井筒屋版等がある。本文も諸本の間で複雑な異同を示しているが、中で、杭全神社藏室町末期絵巻・天理図書館藏元和八年絵巻・丹緑本以下の版本系では、終りに五衰殿女御が聖の修法によって蘇生することを述べるのが特徴的である。

松本氏は、『熊野の本地』と題されるテキストが数多く伝存していることと、それら数多く伝存するテキストを系統付ければ、大きくは二系統に分類されることを指摘したのである。つまり「終りに五衰殿女御が聖の修法によって蘇生することを述べるのが特徴的」であり、「五衰殿の女御が蘇生して、息子である王子や王、彼らを導く僧侶らとともに神として熊野に垂迹する」までを語る系統と、「五衰殿の女御が蘇生せず、息子である王子に供養されるが、彼らとともに神として垂迹する」ことを語らな

い系統とに分類したわけである。<sup>4)</sup> 小稿に取り上げるのは『熊野の本地』諸本のうちの前者、つまり「五衰殿の女御が蘇生して、息子である王子や王、彼らを導く僧侶らとともに神として熊野に垂迹する」系統であるのだが、まず、この系統に「特徴的」であると松本氏が指摘した展開が、熊野における縁起譚として伝えられるモノガタリにおいて「特徴的」、言い換えるとすれば「独自」であることを確認しておきたい。さらに『熊野の本地』諸本のうち「五衰殿の女御が蘇生せず、息子である王子に供養される」ことを語るのみの系統に分類したものと同様のモノガタリを伝える『神道集』に収載される「熊野権現事」をも加えて、「熊野」における本地モノガタリは『旃陀越国王経』が原拠であるとも指摘したのである。

## 二 「旃陀越国王経」、『神道集』に収載される「熊野権現事」、『熊野の本地』の共通項

『熊野の本地』諸本や『神道集』に収載された「熊野権現事」、さらには、それらの原拠であると指摘される『旃陀越国王経』については、モノガタリの展開において次にあげる八項目が共通している。

- 一、国王の妃が懐妊すること
- 二、懐妊した妃が他の妃から妬まれること
- 三、懐妊した妃が殺されること
- 四、王子が誕生すること
- 五、妃の死後、母乳が出続けること
- 六、王子が鳥獸と共に暮らすこと
- 七、王子が仏道修行をすること
- 八、王子が王に会いに行くこと

つまり、『旃陀越国王経』さらには『神道集』に収載される「熊野権現事」には、『熊野の本地』諸本に語られるような「五衰殿の女御（旃陀越国王経）には「小夫人」とあり「五衰殿の女御」とは記されていない）」に関するモノガタリを詳細には語られていないのである。しかし、『熊野の本地』諸本の一系統に語られる「五衰殿の女御のモノガタリ」には、観世音菩薩信仰さらには『法華経』の「観世音菩薩普門品」の功德が語られるのみでなく、『旃陀越国王経』さらには『神道集』に収載された「熊野権現事」には含まれていない、独自の記述を有するのである。

そこでまず、本章冒頭に列挙した八項目にわたる共通点を指

摘できる『旃陀越国王経』つまり『神道集』に収載される「熊野権現事」や『熊野の本地』諸本の原拠とおぼしい漢訳仏典について、その概要を確認しておく。

「旃陀越という国王は、小夫人という一人の后を寵愛し王子を懐妊する。しかし他の夫人らはそれを妬み、金を与えた婆羅門に、「生まれてくる王子は国の悪いとなるだろう」という偽の占いの結果を王に伝えさせる。王はその偽の占いを信じ、婆羅門の言うとおりに小夫人を殺害してしまう。小夫人の亡骸は葬られるが、塚の中で王子が誕生する。小夫人の半身は朽ちることなく母乳が出たため、王子は成長していく。三年後に塚が崩れると、王子は鳥獸と戯れて過ぐす。六歳になった時に、仏陀の化身である沙門が現れる。そして王子は出家することとなる。後に、沙門が王子を旃陀越王の下へ向かわせる。王子は王に仏教へ帰依することを進め、沙門の下へ誘い、そして王子が旃陀越王の子であることを明かす。」

つまり、『神道集』に収載される「熊野権現事」や『熊野の本地』諸本と比較すると、次のような相違点があったことを確認できるわけである。

〔旃陀越国王経〕、『神道集』〔熊野権現事〕、『熊野の本地』の相違点に関する表(一)

〔旃陀越国王経〕	国名	妃の名	王の名	僧の名
〔神道集〕	舍衛国	小夫人	旃陀越王	沙門
〔熊野権現事〕	摩訶陀国	五衰殿の女御	善財王	喜見上人
〔熊野の本地〕	摩訶陀国	五衰殿の女御	善財王	智見上人

〔旃陀越国王経〕、『神道集』〔熊野権現事〕、『熊野の本地』の相違点に関する表(二)

〔旃陀越国王経〕	他の妃達の謀りによって殺害	五衰殿の女御が観音経を誦し誕生	白骨化した	三歳
〔神道集〕	他の妃達の謀りによって殺害	五衰殿の女御が観音経を誦し誕生	水となって消えた	四歳
〔熊野の本地〕	占いに騙された王の命令によって殺害	小夫人の亡骸が埋められた塚の中	記述なし	六歳
	妃の最期	王子誕生時の状況	妃の亡骸	王子が僧と出会った時の年齢

国名や人物名の相違など、『旃陀越国王経』が本当に原拠であるか否か疑いを持たざるを得ず、他に典拠たる文献の出現を想

起させもする。しかし、本稿においては松本氏の指摘に従いあくまでも「原拠」の一つとみなすしかない。とはいえ、その展開においては、『神道集』や「熊野の本地」諸本の一系統(「五衰殿の女御」の蘇生以下を含まない系統)の「原拠」たる内容であることを確認できる。

では次に、『神道集』に収載された「熊野権現事」とは、どういったモノガタリを語るのだろうか。松本氏は『神道集』に収載される「熊野権現事」は『旃陀越国王経』よりも、物語としての潤色が豊かであることを次のように指摘している。<sup>5)</sup>

五衰殿物語の原拠を「旃陀越国王経」とする前提に立つて、再び両者を比較すると、仏典の説話に比し、五衰殿モノガタリには物語としての潤色が非常に豊かに施されている。たとえば、一夫人が王の寵愛を集めることについて、経は「王小夫人、特見珍重、時兼娠」と記すだけであるが、「神道集」では、五衰殿女御は千人の后の中には再開の悪女であったので、王はこの女御を捨置き、その御殿も荒れるに任せる有様であった。女御はこれは過去の宿業と悲しみに、千手観音に祈ると、生を替えずに三十二相八十種好を具足して、紫磨金色の身となり、一変して大王の寵愛を一心に

集めるに至ったと述べている如きである。

また、松本氏は「五衰殿物語の脚色の中で、特に問題となるのは、五衰殿女御の殺害と王子の誕生、及びその王子を喜見聖人なる聖が救いだす条である。」と指摘した上で、次のように述べている。<sup>(6)</sup>

さて、このように「神道集」の語る五衰殿物語が、原拠の説話の母の死と児の出生の順序を変えて脚色を加えた結果は、王子誕生の奇瑞と女御の最期の様を印象づける上で、効果を挙げていると思われる。

つまり、『神道集』に収載される「熊野権現事」は、『旃陀越国王経』と共通した部分はあるものの、「五衰殿の女御」の人物像や王子の出生については脚色を加えられているのである。

そして、『神道集』に収載される「熊野権現事」にさらに潤色を加えて形成されたのが、『熊野の本地』である。次に提示する比較対象表一は、『旃陀越国王経』と『神道集』に収載される「熊野権現事」、「熊野の本地」を比較対照したものである。

(比較対照表一)

『旃陀越国王経』	○	○	○	○	懐妊	出産と死	蘇生	垂迹
『神道集』	○	○	×	×				
『熊野権現事』	○	○	×	○				
『熊野の本地』	○	○	×	○				

『神道集』に収載される「熊野権現事」と、『熊野の本地』を比較しても、『熊野の本地』は潤色が豊かであると指摘することができる。また、『旃陀越国王経』では王子が主人公として語られているが、『神道集』に収載される「熊野権現事」や『熊野の本地』諸本においては「五衰殿の女御」についても多く語られ、モノガタリにより深く関与していくのである。つまり、「五衰殿の女御が蘇生して、王子や王、彼らを導く僧侶とともに熊野に飛来し、神として垂迹する」という内容は、『旃陀越国王経』さらには『神道集』に収載される「熊野権現事」、「熊野の本地」における一系統に付け加えて語られたと考えられる。

『旃陀越国王経』、『神道集』に収載される「熊野権現事」そして『熊野の本地』諸本に共通に語られる「五衰殿の女御」(『旃陀越国王経』には「小夫人」とあり「五衰殿の女御」とは記され

ていない)のモノガタリ」とは、摩迦陀国の大王・善財王に最も寵愛された后について語るモノガタリである。しかし、『神道集』に収載される「熊野権現事」あるいは『熊野の本地』諸本のうちにも、「五衰殿の女御」が、王の寵愛ゆえに他の后たちから嫉妬をうけ、王子を身ごもりながらも山中に連れさられ、辛うじて出産するが、出産の後に命を奪われるまでを語るテキストが存在しているものの、「五衰殿の女御」が蘇生し、王子や王、彼らを導く僧侶とともに熊野に飛来し、神として垂迹するまでを語らないテキストが伝存するのである。ではなぜ『神道集』に収載される「熊野権現事」語られていない、「五衰殿の女御」の蘇生を語るモノガタリを付け加えたテキストは形成されるに至ったのだろうか。そしてなぜ、観音信仰に裏付けられる、「五衰殿の女御」のモノガタリを語るに至ったのだろうか。

### 三 『熊野の本地』に語られる『法華経』

『熊野の本地』における「五衰殿の女御」のモノガタリは、『神道集』に収載される「熊野権現事」よりも、観世音菩薩信仰さらには『法華経』の「観世音菩薩普門品」の功德が詳細に語られていることが指摘できる。『熊野の本地』では、「五衰殿の女

御」が王の寵愛を受けた後、山中に連れられ殺害されるまでの間に、観世音菩薩信仰の功德によって利益を得るという場面がある。なお、この、「五衰殿の女御」が観音信仰の功德によって利益を得ることについては、中野真麻理氏が指摘している<sup>7)</sup>。

また、「馬が観音の化身である」という認識については、櫻井陽子氏も『法華経』の「観世音菩薩普門品」の海難譚の解釈として、観音が馬となって衆生を救済するという認識が中世にあったと指摘している<sup>8)</sup>。

次に掲げる表は、「熊野の本地」と、『神道集』に収載される「熊野権現事」、「旃陀越国王経」も加えて、観世音菩薩信仰の霊験譚として語られる箇所についての比較対照表である。

(比較対象表二)

	容姿の変 化についで	懐妊に ついで	呪詛に ついで	馬に ついで	刀に ついで
『旃陀越国王経』	×	×	×	×	×
『神道集』	○(私の 姿になる)	○	×	×	○
『熊野権現事』	○(姿が美 しくなる)	○	○	○	○
『熊野の本地』	○(姿が美 しくなる)	○	○	○	○

まず、観世音菩薩信仰による靈驗譚は『旃陀越国王経』には描かれていない。また、『神道集』に収載された「熊野権現事」にも、観世音菩薩信仰の功德によつて醜惡であつた容姿が変化する、そして大王の寵愛を受けて王子を授かるという部分は描かれていないものの、『熊野の本地』に語られているような、呪詛を退ける、刀杖難を退けるといふ、観世音菩薩の靈驗譚は描かれていないことが確認できる。

さらに『熊野の本地』には、中野氏が指摘する以外にも、観世音菩薩信仰の功德を描いた場面が見られる。それは、王子が、生まれた後に獣たちに守られて育つ場面である。『法華経』の「観世音菩薩普門品」には、次のような経文がある。<sup>9)</sup>

若悪獸圍遶 利牙爪可怖  
念彼觀音力 疾走無邊方

『法華経』の「観世音菩薩普門品」では、観音を信仰していれば獣たちさえも従えることができると説くのである。このことから、「五衰殿の女御」の体や、王子が獣たちに食べられなかったのは、観世音菩薩信仰の功德であつたと考えられるのである。ところで、ここで指摘する観世音菩薩信仰、經典でいえば『法

華経』の「観世音菩薩普門品」とは『法華経』卷八第二十五「観世音菩薩普門品」が単独で信仰される場合の名称である。『法華経』の「観世音菩薩普門品」は、現世利益を説き、信仰すれば現世において利益を得られることを解き明かすものである。

『法華経』は、その卷五第十二「提婆達多品」に代表されるように、女性の成仏を解き明かすために用いられるなど、女性の仏教信仰に寄与した經典であつた。また、女性たちが『法華経』の卷五第十二「提婆達多品」と、卷八第二五「観世音菩薩普門品」を信仰していたのである。

つまり、『熊野の本地』は観音信仰の功德による靈驗譚を付け加え、『法華経』卷八第二五「観世音菩薩普門品」の功德を説く、言い換えると、『法華経』の功德を説くモノガタリであつたと読み解けるのである。

#### 四 蘇生譚を含む『法華経』功德譚

『熊野の本地』が、『法華経』の功德を語るモノガタリであることは、観世音菩薩信仰のみでなく、「五衰殿の女御」が蘇生をすることからも指摘できる。蘇生を含む功德譚とは、經典の功德、なかでも『法華経』の功德を語るモノガタリにおいて数多

く確認することができるためである。

そこでまず、『大日本法華驗記』（以降、『法華驗記』とする）

「第二十八 源尊法師」と、「第九十七 阿武の大夫入道沙弥修覚」を例として取り上げ、『法華経』の功德を語るモノガタリに蘇生譚が組み込まれていることを確認しておく。

「第二十八 源尊法師」<sup>①</sup>

沙門源尊。以幼童時。離父母家。來住法家。心操軟淨。永背不善。稟持法華。日誦誦數部。未得諷誦。盛年之此。受取重病。數日惱苦。即入死門。臨至冥途。赴閻王庁。冥官冥道首戴冠。鬼身著欠掖。或著甲冑。又著襦襦。腰帶屬鏤。手捧戟鉞。或向書案。開發櫃等。或簡牒註記善惡。見其作法尤可怖畏。傍有貴僧。手執錫杖。又持經箱。即申閻魔王。沙門源尊。誦誦法華經年序多積。即坐□座。開箱受經。即捧經卷。從第一卷至于第八卷。高音誦誦經。閻王冥類。合掌聞之。貴僧將出。沙門源尊令向本国。即見貴僧。觀世音形也。汝還本国。能誦此經。我加威神。令暗誦經。即經一日夜。即得蘇生。重病除癒。氣力尋常也。從閻王聽誦經已來。通利前後。悉皆憶持。徹誦一部。每日誦誦三部法花。二部化也。一部自行。乃至最後。雖有少病身心不乱。誦法

華即遷化矣。

(一) 生前に仏道種業を行っていること

(二) 不本意な死を遂げること

(三) 死後の世界で生前の仏道修行の功德を認められること

と

(四) 蘇生すること

(五) 蘇生後は、死後の世界で契った通りに、仏道修行に励むこと。

(プロット)

「第九十七 阿武大夫入道沙弥修覚」<sup>②</sup>

長門国阿武大夫入道沙弥修覚。在俗之間。猛惡不善。殺生放逸。無有善心。勢德充滿国。恣作惡行。年老受病。欲臨死門。集諸法師。転誦法華。祈乞除病延命之由。遂及死門。諸僧皆去。有一持經者。為後世拔苦。向於死人誦法華經。至第八卷是人命終為千仏授手令不恐怖不墮惡趣即兜率天上弥勒菩薩所弥勒菩薩有卅二相大菩薩衆所共圍繞之文。此死人甦。起居合掌。聞此文。從眼出淚。歡喜進僧。令誦六七反。言聖人云。我向冥道。惡鬼驅迫將去。誦此文時。天童子來。將還我。令向人界。作是語已。所惱除癒。即發道心。剃除頭髮。出家入道。其後數年。持法華經。一心誦之。道



心堅固。永留惡心。作善為志。乃至最後。作種々善根。請諸沙弥。令誦法華。我亦誦經。一心念仏。成就正念。而帰無常。傍僧夢見。威儀具足。語諸僧言。我今依妙法力。得生兜率天矣。

(一) 生前に、仏教を信仰していること

(二) 不本意な死を遂げること

(三) 他者の供養を得ること

(四) 蘇生すること

(五) 蘇生後は仏道修行に励み、死後は天界に生まれること

と

法華經功德を語るモノガタリに蘇生譚を組み込む例であるが、こういった蘇生譚を組み入れた法華經の功德譚には、次のような展開を辿ることができる。

(一) 生前に仏道修行をする（あるいは仏教を信仰する）

(二) 病などによって、不本意な死を遂げる。

(三) 死後の世界で、生前の仏道修行の功德を認められる。

（あるいは他者の供養を得る）

(四) 蘇生する。

(五) 蘇生後は、死後の世界で仏と契った通り、往生のために更なる仏道修行に励む。（その後に天界などに往生する）

なお、このような蘇生譚を持つ功德譚は、『法華驗記』に限らず、『今昔物語集』に収載される「法華經の功德譚」を伝える説話にも確認することができる。『今昔物語集』卷十二から卷十四には、『法華經』を中心とする經典の靈驗功德譚などが収載されている。なお、蘇生を語るモノガタリは『今昔物語集』に二十六話、『法華驗記』に八話収載されていた。

つまり、生前に觀世音菩薩を信仰し、謀りによって命を落とした後に、王子や聖人の供養によって蘇生し、熊野に仏の化身として垂迹するという「五衰殿の女御」のモノガタリが、蘇生譚を持つという点において共通しているということが出来る。

以上の考察によって、『熊野の本地』における「五衰殿の女御」モノガタリは、觀世音菩薩信仰つまり『法華經』の功德を語るものであった。「五衰殿の女御」の蘇生を語ることは、「五衰殿の女御」を主人公として『熊野の本地』を語るために不可欠であったと考えられる。

これらのことから、一度命を落とした後に蘇生するというこ

とは『法華経』信仰の功德を説くモノガタリの一つであったと考えられる。つまり、「五衰殿の女御」が蘇生するというモノガタリは、『法華経』信仰の功德を説くモノガタリとして形成されるために必要であり、『神道集』に収載される「熊野権現事」には語られていなかったものの、付け加えられた可能性が高い内容であったと指摘することができるとして、その背景には、熊野信仰における『法華経信仰』の定着があったと考えられる。

「五衰殿の女御」のモノガタリが『法華経』信仰の功德を説くモノガタリとして形成されたことには、「五衰殿の女御」すなわち女性たちが救われるモノガタリとして存在するために、女性が信仰した『法華経』によって救われようとした女性たちの信仰の証をモノガタリによって具現しようとしたことが考えられる。女性たちの信仰の場であった熊野において、その縁起として語られた『熊野の本地』に、「五衰殿の女御」のモノガタリが形成されたであろう過程には、熊野において実際に行われていたであろう信仰がその背景にあったことも指摘できる。

## まとめ

小稿では、『熊野の本地』に語られる「五衰殿の女御のモノガ

タリ」が『法華経』の功德によって天界に生まれるという、いわゆる『法華経』の功德譚を踏まえつつ形成されていたことを指摘した<sup>12)</sup>。また蘇生とともに、いくつかの功德を加えることによって、女性が『法華経』の功德によって救われ、やがては神として垂迹するというモノガタリに変容したことを指摘した。熊野という信仰の場において、女性が救われる縁起を唱導することは、重要な意義を持っていたと考えられる。

熊野で唱導されるべき縁起は、本来ならば、王子が神として垂迹するモノガタリであり、その関係者とともに勧請されていることを語れば良かったはずだろう。しかし、王子の母、つまり女性である「五衰殿の女御」が神として垂迹し、熊野に勧請されたモノガタリを加えることによって、熊野は「女性たちの信仰の場」として印象付けられていったものと考えられる。熊野の縁起として語られた『熊野の本地』に、「五衰殿の女御のモノガタリ」が加えられた背景には、実際に、熊野において展開したのであるという信仰世界が存在したものと考えられる。

また、王子を出産した後に、観世音菩薩信仰の功德によって「五衰殿の女御」の首が切れずに、命を落とすことなく王子を育てるといったストーリー展開も十分に考えられるはずである。なぜ、そのような展開を持たなかったのだろうか。それは、「五衰

殿の女御」の願いは、自分が助かることではなく、自分の命に代えてでも王子の命を守ることであったためである。そして、母親としての「五衰殿の女御」の姿を描くことで、女性の共感を呼び起こそうとしたのではないだろうか。

熊野権現といえば、その信仰を全国に広め歩いた熊野比丘尼と呼ばれる女性宗教者の存在が知られている。熊野比丘尼たちは中世から近世にかけて活躍し、「那智參詣曼荼羅」や「熊野観心十界図」を主に女性たちに絵解きして布教・勧進活動に従事していたが、この『熊野の本地』も絵解きの台本として用いられていたことが指摘されている。熊野比丘尼の語りを通して、女主人公五衰殿の苦悩は女性たちの共感を呼んだことであろう。『五衰殿』とも呼ばれるこの物語は、苦しむ神を描く本地物の代表であるが、それは苦しむ女性、苦しむ母のモノガタリでもある。その、苦しむ女性であり母である「五衰殿の女御」が救われるというモノガタリが付け加えられたことは、女性が信仰する場として熊野という聖地を印象付けるものであったと考えられる。

〔注〕

(1) 松本隆信氏「熊野の本地」考序説」(民衆宗教史叢書二

一『熊野信仰』宮家準氏編所収、一九九〇年、雄山閣出版株式会社)

松本隆信氏「熊野の本地」(『日本古典文学大辞典』、岩波書店)

松本隆信氏「中世における本地物の研究(四)——本地物の成立と北野天神縁起——」(『斯道文庫論集』十四、一九七七年十二月)

(2) 「熊野の本地」考序説」(民衆宗教史叢書二一『熊野信仰』宮家準氏編所収、一九九〇年、雄山閣出版株式会社)

(3) 「熊野の本地」(『日本古典文学大辞典』、岩波書店)

(4) この二系統については、別稿にて述べることにする。

(5) 松本隆信氏「熊野の本地」考序説」(民衆宗教史叢書二一『熊野信仰』宮家準氏編所収、一九九〇年、雄山閣出版株式会社)

(6) 松本隆信氏「熊野の本地」考序説」(民衆宗教史叢書二一『熊野信仰』宮家準氏編所収、一九九〇年、雄山閣出版株式会社)

(7) 中野真麻理氏「熊野の本地」私注」(『成城国文学』九一九九三年三月)

(8) 『延慶本平家物語考証』(編者水原一 発行所新典社

一九九二年五月三〇日)

(9) 『法華経(下)』(訳注者 坂本幸男 岩本裕 発行 岩波書店)

(10) 『大日本国法華経験記 校本・索引と研究』(編著 藤井俊博 発行所 和泉書院 一九九六年二月二十八日)

(11) 『大日本国法華経験記 校本・索引と研究』(編著 藤井俊博 発行所 和泉書院 一九九六年二月二十八日)

(12) 蘇生するというモノガタリを有することについて、渡辺守邦氏は、「本地物の一般的な型」として、次のように指摘している。

本地物とは、神仏の前世物語と垂迹譚との二つの部分からできているものであるが、その構造を概略的に言ってみれば、発端に申し子譚、父母との死別などが有って、主人公のさまざまな苦難とその結果としての死を経て終末の部分で蘇生し垂迹をする、というのが一般的な型である。

〔「本地物語類研究序説(一)——女性の文芸の見地から——」  
『大妻女子大学文学部紀要』一、一九六九年三月)〕

『熊野の本地』も、渡辺氏の指摘に沿って読み解くことはできる。しかし、小稿の考察から蘇生譚は本地物の一般的な型である以前に、『法華経』の功德譚を語るためのプロットであ

つたと指摘する。

(おがわ みちよ／本学大学院生)